

あるがままに

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事・相談役)

昨年1月に75歳になりました。一つの大きな変化は3年間お世話になった健康保険組合を離れ、後期高齢者医療保険に加入したことです。これまで社会保険の担当者から毎年健康診断の案内を受け、結構真面目に受けてきました。しかし、これからはあるがままに生きたいと思っています。

健康診断には重要な病気の早期発見に加えて、生活習慣病の予防という目的があります。そのため、一定の基準から外れた項目がある

と再検査や医師の診察を受けるように指示されます。私の場合4代になってから高脂血症として診断され、いつも呼び出しがかかってきました。最初は生真面目に医師の診察や栄養指導を受けました。当時はメバロチンが開発されて間もないころで、服用に少し逡巡すると医師が「心筋梗塞などのリスクが高いのですよ」と半ば叱り付けるように言いました。服用後しばらくしてコレステロール値はみるみる下がりました。何回目かの診察で別の医師から「そろそろやめましょう」と言われました。後から考えると、最初は副作用のない薬とされていたのに結構深刻な副作用が判明してきたからかもしれません。

結局、服用をやめるとコレステロール値は再び基準値を大きく上回るようになりました。

当時はテレビ等でドロドロ血の恐ろしさが盛んに喧伝され、血管にコレステロールが付着して血流が悪くなったり、血管がもろくなったりすると言われていました。しかしあれから30年呼び出しには二度と応じずコレステロール値は高止まりしたままですが、何の問題もなくいたって元気に過ごしています。

何年か前に講演をお願いした大櫛先生によれば破れた血管にLDLが集まっていたために悪者にされましたが、実は修復のために集まっていたのです。コレステロール値が高いと血管が詰まると言われましたが私の血圧は低いままで。要するにコレステロール値は健康とは何の関係もないのです。

もう一つの重要な指標は血圧です。血圧が基準値を上回ると多くの医師は降圧剤を処方

します。生活習慣病の予防によって将来の医療費が節減できると厚生労働省は、喧伝してきましたが、基準値の厳格化によって大量の高血圧症患者が作り出され、医療費の大幅な増加につながりました。

ヨーロッパでは取り敢えず降圧剤を出すのではなく、運動の実践が奨励されています。副作用のある降圧剤の処方には慎重な姿勢で臨んでいるわけです。しかし、アメリカでは再び基準が厳格化され降圧剤が積極的に使用されています。日本もアメリカの流れを踏襲しているようで、ある若い医師は「最近降圧剤を積極的に使うのですよ」とのたまいました。そもそも血圧は加齢によって上昇していくものです。年齢を無視して一律の基準を当てはめる態度はいかなるものでしょうか。